

IV-11

河川の洪水による城の立地選定と移転に関する研究

ー 清洲と高知をケーススタディとして ー

日本大学理工学部 正会員 吉田 充

日本大学理工学部 正会員 新谷洋二

1. はじめに

中世後半から近世初頭に、全国各地で城と城下町が盛んに建設された。城の建設から発展・経営にあたって、洪水に悩み、土木技術によって対応してきた様子は、既にいくつかの事例研究¹⁾を行ってきた。

本研究は、その一連の研究として、新たに城と城下町における洪水の歴史の中で、どのような対策を講じて克服してきたのか、あるいは放棄せざるを得なかったのかという事例に着目して、清洲と高知の2つのケースから河川や洪水との関わり合いの点を研究して、時代の経過・地域性をふまえて検証する。

2. 研究の方法

本研究に関しては、城郭史・都市史・河川史等を参考にして、城の立地選定に関する歴史的背景と地理的条件を把握する。洪水の被害状況が文献に鮮明に記載されている箇所は参考にし、地形図・絵図面などを時代ごとに比較してみることによって、城と城下町における河川との関わり合いが時代の経過とともに変化していく様子を取り扱った。

3. 城の移転と洪水への挑戦

近世初頭において中世の城を改造しながら使おうとしたものの、河川氾濫によって被害を蒙り居住に耐えかねて、要害の地を捨てて城・城下町を移転せざるを得なくなることも多く、河川の洪水対策は重要な問題であった。それに対して、洪水に苦しんで一度棄てた城を後に治水に正面から挑戦し、河川改修工事を行い、再度築城に成功した事例も見られる。

今回は、洪水のため移転をした清洲城と、再度築城に成功した高知城の事例を取り上げたい。

4. 清洲城と城下町の移転²⁾³⁾

清洲城は、濃尾平野のほぼ中央を流れる五条川の自然堤防沿いに築かれた城である(図1)。築城は尾張守護斯波氏によってなされたが、後に織田信長も在城した。清洲城の最終的な縄張が完成するのは、織田信雄が大地震のため破損した長島城から本拠を

移した天正14年(1586)以降と考えられている。その後、豊臣秀次・福島正則・松平忠吉が相次いで城主に封じられたように、豊臣・徳川両政権下において、重要な城として位置付けられるものであった。清洲城は、尾張の西南平地に位置し、木曾川が遠く西方にあり、五条川は城脇を流れ、北西には沼沢が存在していたため、要害として一応の条件を備えていた。しかし、低地であるため、水はけが悪く、五条川上流からの増水と木曾川の逆流とによって、しばしば浸水し、しかも井戸水の便に乏しく、かつ有事の際には水攻めを受ける危険性があった。

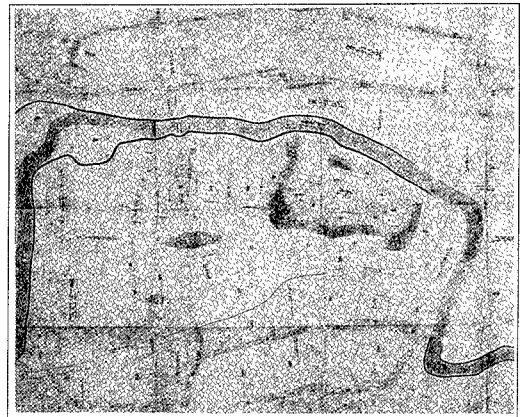


図1 春日井郡清須村古城絵図(蓬左文庫蔵)

慶長12年(1607)松平忠吉の急死後、家康は9男義直を清洲に封じ、城地の拡張を考えた。この際、家臣の山下氏勝は城地が適切でないことを訴え、家康に献言した。そこで、家康はいろいろ実地に検討した結果、慶長14年に清洲を棄てて、名古屋に築城することを決定した。名古屋は全体が低い台地上にあり、洪水からは免れるが水運の便がないため、築城時の材料運搬のことも考えて、台地の西淵に沿って堀川を開削して、伊勢湾と城下町を結んだ。名古屋城と城下町の建設に伴い、清洲より町ぐるみ移転したため、名古屋は尾張62万石の城下町として発展したのに比べ、清洲は小さな宿場町となってしまった。

Keywords: 城の立地選定・河川洪水・城の移転

【連絡先】 〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8 (Tel&FAX) 03-3259-0679

5. 高知城の移転と建設⁴⁾

高知城は浦戸湾の奥、鏡川のデルタの中の独立丘陵・大高坂(おおたかさ)山を核とする城である。城の構成は、山頂を削って平らにし、南に本丸、北に二の丸を並べ、東に一段低く三の丸を構えた。曲輪は全て高石垣で固め、周囲に帯郭を廻した(図2)。

城域プランは東西480m、南北は西側で300m、東側で550mの不整4辺形で3万坪といわれる。城の南に鏡川、北にその支流の江の口川が流れ、東・南・西の3辺はコの字形に堀をめぐらしていた。

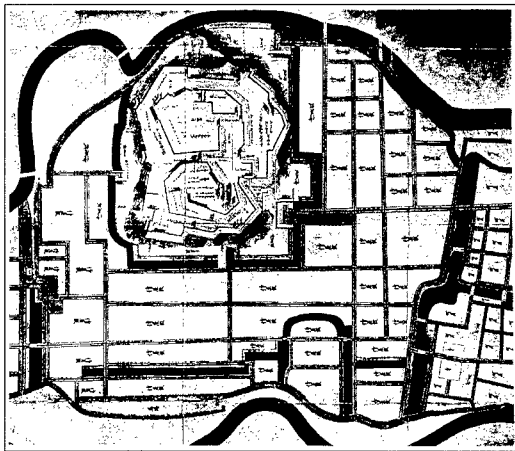


図2 高知城絵図(国立公文書館蔵)

戦国時代末期、四国全土をほぼ手中に収めた長宗我部元親は、天正13年(1585)豊臣秀吉の四国討伐により敗れて、土佐1国のみを領有を認められた。元親は、天正15年6月に秀吉の九州討伐が終了した後、新しく強力な政治体制を確立し、同時に強固な経済基盤を造りあげる必要を痛感し、国内の整備を急いだ。そのため、土佐国全土の検地と、領国の新首府の建設を行うこととした。歴代の居城であった土佐平野北部の山城、岡豊城を棄てて、土佐平野の中央、大高坂山に、新たに平山城を築いて移った。当時、その地域は大きな水域をもっていた浦戸湾の湾奥西岸に、大高坂山をはじめ、比嶋・小津などの小丘陵を点在させて広がる低湿地であった。そこで城周辺の河川の流路を付け替え、沼沢を埋め、高低のある土地を整備し、城下町を建設し、岡豊城下の家臣や町人を移住させた。しかし、城下を流れる河川の洪水に苦しみ、再び居城を浦戸に移すための工事を始め、天正19年に移り、家臣や町人もこれに従った。現在、高知市中心部から海岸の方へ行くと、桂浜が

あるが、これに接した丘陵地が浦戸城の城址である。

このように、大高坂城に在城わずか3年で、再び居城を移したことは、いかに洪水の被害がひどく、侍・町人の不安が大きかったかが想像できる。

その後、関ヶ原の戦いで西軍に属した長宗我部氏は除封され、慶長5年(1600)山内一豊が土佐1国20万石の領主として封じられた。一豊は、ひとまず浦戸城に入ったが、浦戸城は要害の地とはいえ、土地が狭く、陸地の突端で土佐国の政治・経済の中心地としての役割を担うべき近世の城として、城と城下町を拡張する余地がほとんどなかった。このため、長宗我部元親が失敗した大高坂に再び城と城下町の建設を考え、築城の名手といわれた百々越前安行を高禄で召し抱え、慶長6年総奉行として築城にあたらせた。安行は築城を行うとともに、城下を町割りして、諸藩士に邸宅を与え、浦戸の町人や近村の郷民を移住させ、堤防を築き、河川の流路を変え、大いに城下の治水工事を行った。

このようにして、城下町は次第に整備され、その周囲を堀または河川で囲み、香月田・西・南の三方に土塁を築き、城下を洪水から守る堤防として役立たせた。山内一豊は美濃国出身であり、若い頃は濃尾平野で過ごした。また、近江国出身である百々安行も関ヶ原の戦いまでは美濃国岐阜城主織田秀信の家老を勤めていたことを考えると、濃尾平野の低湿地に多い輪中堤の土木技術を土佐に導入して成功を収めたのではないと思われる。

6. まとめ

清洲から名古屋に移転した時期と、山内氏が高知城を築城した時期は近い。ともに河川水害により城地を移転したという背景は同じであるが、城と城下町を思い切って移転した事例と、時代が経過することにより、城主が代わり、それにともない優秀な河川工事技術者が治水にあたることにより、それまで不可能であった場所に築城することができた事例を読み取り、検証できた。

【参考文献】

- 1) 吉田充・新谷洋二, 第18回土木史研究発表会, 『城と城下町の建設・形成過程における水辺空間との関わり合いに関する研究』, 1998年
- 2) 清洲町史編纂委員会, 『清洲町史』, 1969年
- 3) 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書, 清洲城下町遺跡Ⅴ』, (財)愛知県埋蔵文化財センター, 1995年
- 4) 高知市史編纂委員会, 『高知市史』, 高知市, 1971年